職場に渦まく声・声・声……

血のしたたる ビフテキを食らい 豪邸に住む奴らよ 働く者の声を聞け

新聞〝はぐるま〟から

三川指導部九分会（坑外。前川哲也分会長）新聞〝はぐるま〟（四月十五日発行。NO・九七）は一面に「二〇%三万円の賃上げを！　坑外も厚生年金を五十五歳からにせよ，炭鉱年金を倍額に引上げよ」の見出しで、春闘に寄せる職場の声を伝えている。

そして末尾に叫んでいる――

「くたくたに働かされ、せめてタマゴ焼きで栄養補給。俺たちの血の一滴までしぼりとり、血のしたたる厚いビフテキを食らい、豪邸に住むひと握りの奴らに要求する三万円賃上げは当然だ」と。

きて同新聞が伝えた、いま職場に渦まいている声は？

――他産業が上がれば俺たちも上がる。共闘でがんばろう。

――ストストでなしに、他に方法はないものか。

――賃上げも切実だが、生活がつらかけんストはつらか。

――同じ職場に働きながら、闘わん人たちに矛盾を感じる。自分ばかり良い子にならず、ともにがんばろう。

――収入の減らん労働時間の短縮にせんとでけんばい。

――職場要求は三池労組に代弁してもらっとるばってん、賃上げは俺たちの組合も当然がんばるはず。

――ストしたくてもできない。うらやましい。

――炭鉱の賃金が上がると、俺たち社外工もよくなる。新労が〝スト丧〟もらっているのがいやらしい。

――中途半端な妥結はするな。幹部は本気でやれ。

――党利党略的な闘いはいや。真に労働者のための闘いをやれ。

――国民春闘なら、国民の問題も真剣にやれ。それが自分たちの利益にもつながる。

――ストばかりにたよらんで、国民から支持される闘い方をせろ。

――闘ってもとれんじゃっか。

――物価に追いつく賃上げを。

――革新も、大手だけの賃上げだけしか考えとらん、というこつもなかろぼってん。

――中小の少なか賃上げでは、物価値上げで他との格差がひどくなる一方だ。どげんかならんもんか。

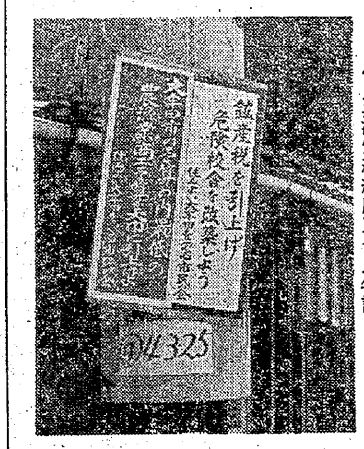
――直轄工の特定休日には、せめて特休でもつかわせてくれたらよかが。

いずれも、少しでもしあわせになる道を強くのぞんでいる点共通しており、春闘に期待しているところは大きい。

全職場新聞を発行しよう！

こんど三池労組結成三十周年記念に際して、職場新聞の展示会が開催されます。それはいまの情勢が、この活動を切実に求めているからです。

このとき全職場新聞の発行に成功して、職場闘争の旗手となることを宣言しましょう。　編集部



明るい大牟田市をつくる市民会議のポスター。そこかしこの壁や塀から、春闘をはげましている。

ねばり強くがんばりつづける、三川指導部9分会の新聞〝はぐるま〟。

四山からのレポート

統合合理化の攻撃が

手始めは電気と機械から

四山鉱の電気・機械の統合は、人べらし合理化の一環として、以前から会社は意図していた。ただ、それぞれ専門的な知識や技術を要し、さらに作業範囲や職場での人間関係などの問題から、実施に踏み切れずにいたのが実態だった。

それが四月六日から部分的統合という形で、職場の抗議や反対の声をおしきり、実施された。三千人、二万トン体制への布石が、こうして着々と四山鉱で準備されて行く。四山鉱五百三十メートル坑道五十卸開発部内は、柱房採炭が二カ所、払づくりのための小切羽一カ所で、従来五人の坑内電気工がここにいたが、二人ははねだされ、そのほかの三人に坑内機械工の七人でPCスライドはじめ、いっさいの電気・機械の仕事が、共同作業として行なわれている。

この統合を実施する前に、新労組の委員、代議員の数人を、提案者である中野副長がある場所に呼んで内容を話し、協力要請を行なっていることが明らかになり、新労組内部でも怒りの声が続出。あわてた会社は、四月一日実施の予定を、六日まで延ばしている。

その間形だけの大衆討議が行なわれ、討議の中で新労組員のAさんは、「統合を許すなら、俺たちはますます少くなる人数で、多くの仕事ばせんならでげんごつなる。それが会社のねらいじゃろが。働く者が犠牲になるようなことば、なんで組合は賛成して下部におしつくるとか」と、委員に問いただしたのに、幹部は「そがんことはわからん。文句ンあるなら執行部にきけ」と、はねつけている。このような非民主的な労働組合が、どこにあるだろうか。

そのほか数多くの不満の声や反対意見がでているが、会社や新労の幹部の圧力によっておさえこまれている。

右の事態を重視する四山指導部職場六分会（三池労組。機械と電気）では、代表者五人が中野副長に会い――

一、統合実施の時期。

二、統合の具体的内容。

三、今後の計画。

などについて問いただした。指導部長や職場委員にひと口の相談もなく実施されて行くことに、強く抗議した。

中野副長はその中で言明している。

「三池労組には直接関係ないので話さなかった。試験的段階であるがぜひ成功させ、一～二年後には全山的なものに発展させたい」

この統合のため、二十歳代の若手で、しかも会社に従順な者を特に選んで、個別的に説得している新労組の内部の、下部からの組織的な反撥を押さえ、目鼻のついたところで新労全体をまきこみ、後三池労組にはなし崩しに適用する方法をとってくると見られる。このことを許すならば、近い将来電気、機械はもちろん、採炭なども含めて、必ず〝何でも屋〟をつくり、生産工程の再編成が広がることだろう。

今後は職場の中で、新労組員仲間にも呼びかけて、生産点での闘いをよりいっそう強めてゆくことを意志統一しようではないか。

（この項K記）

三千人の中の五十九人。段ボール業界大手のレンゴー（本社大阪）の第二組合（聯合紙器労組）の組織人員。「不当労働行為のデパート」「第二の近江絹糸」と評された会社側のモーレツな切崩しに耐えて残った人々である。同労組小倉工場支部（二十三人）の〝小つぶでもピリリと辛い〟春闘模様。

昨春闘で、会社側は賃金凍結を打ち出した。「紙キキンのとき百三十億ももうけた会社が、ですよ。聯労は敢然とたちまじした」（室園孝治支部長）。ストや春闘共闘委の応援で大衆行動を重ね、一万六千円の回答を引き出した。もちろん今年も要求額二万五千円の「満額獲得」が目標。「第二組合員は幹部が会社と結託しているので、不満があってもいえない。その人たちのためにも、僕らがやらなきゃ」と若い組合員。

室園支部長らの語るところでは、四十二年の春闘段階から会社はあの手この手の切崩し。組合脱退が続き、三千四百人だった組合員が四十四年二月には二百人に激減。それでもいうことをきかぬ者には徹底的な弾圧が待っていた。室園さんも貼合工場から屑締め係へ配転。勤務時間中便所にいけば処分、それに抗議すれば処分…。四十六年夏までに聯労がかちとった地労委命令、地裁決定は六十余件。

この間、聯労組合員は著しい賃金差別をこうむってきた。同期の人と比べ一万円以上の格差が目標。「第二組合員は幹部が会社と結託しているので、不満があってもいえない。その人たちのためにも、僕らがやらなきゃ」と若い組合員。

室園支部長らの語るところでは、四十二年の春闘段階から会社はあの手この手の切崩し。組合脱退が続き、三千四百人だった組合員が四十四年二月には二百人に激減。それでもいうことをきかぬ者には徹底的な弾圧が待っていた。室園さんも貼合工場から屑締め係へ配転。勤務時間中便所にいけば処分、それに抗議すれば処分…。四十六年夏までに聯労がかちとった地労委命令、地裁決定は六十余件。

この間、聯労組合員は著しい賃金差別をこうむってきた。同期の人と比べ一万円以上の格差

賃金差別とたたかう

レンゴー第一組合

社はあの手この手の切崩し。組合脱退が続き、三千四百人だった組合員が四十四年二月には二百人に激減。それでもいうことをきかぬ者には徹底的な弾圧が待っていた。室園さんも貼合工場から屑締め係へ配転。勤務時間中便所にいけば処分、それに抗議すれば処分…。四十六年夏までに聯労がかちとった地労委命令、地裁決定は六十余件。

この間、聯労組合員は著しい賃金差別をこうむってきた。同期の人と比べ一万円以上の格差

のある者は小倉支部で十一人。

「今でも年一回の慰安会から締め出されたり、新卒の女子社員が第一組合員にだけはお茶を入れてくれない、といった差別がある。しかしこの賃金差別だけは見過ごすわけにはいかない」――室園さんは俳優の渡辺文雄に似た大きな目をむいて語る。

会社の門を出ようとすると守衛さんが記者をよびとめ「取材内容を話して下さい」。もちろんお断りしたが、聯労の置かれてきた厳しい状況がチョッピリ伝わってきた。

×

これは毎日新聞四月十七日朝刊の記事（春闘天気図）です。組合員の人が、編集部に寄せて下さいました。

レンゴー第一組合のなかまへの連帯を表明すると同時に、ともにたたかうことを誓います。

詩

引っ越し

停年退職　堀前はるお

三十年余りの居住地
熊社三十一棟の一
よくもまあ辛抱したもんだ
テレビアンテナだけがポツンと
空にとがっている
昨日までなんでもないように
思っていたものが
思い出となって一つ二つ
波紋のように生まれてくる
四人の家族を葬って悲しみ
三人の子供を授ってその成長
を喜んだ
家
そして闘った
悪らつな資本家どもの
差別に
合理化に
生活を守るためにと
苦しくとも頑張って来た
でも　笑いだけは忘れなかった
心なき草花も
今朝も小さい花弁にいろどり
を走らせ　語りかけてくれる
緑の庭の樹々も
わが家の生活の中に溶けこん
で来てくれた
心の誘うまま歩みを重ねる面
に
朝の風はさわやかだった
小さい草花よさようなら
緑の樹々よありがとう
いよいよ最後の引っ越し荷が
これまでのわが家から運び出
される
組織の力がそこにもあった
団結の力がそこにもあった
たてよこのなかまを結びつけ
ている絆も
朝の陽差しよ
春の風よ
漂って来る桃の花のかおりよ
働く仲間たちの笑い
声に包まれながら
わが引っ越し荷は
これまで生きつづけて来たわ
が家から遠ざかってゆく
ありがとう働く仲間よ
小さくつぶやいては
いっぷく煙草をくゆらしながら
わが引っ越し荷の車の後から
歩く

×

堀前さんは、このほど停年のため退職された方で、新しいお住まいは「荒尾市平山字八反田二二四八―三〇」です。心からお自愛専一にお過しのほどをお祈り致します。